

# 島根県出雲市知井宮町 養龍山多聞院藏角筆文献について

——『声字実相義口筆』『秘藏宝鑰略解懸談』における

角筆による出典の書き入れを中心として——

柚 木 靖 史

## はじめに

養龍山多聞院は、島根県出雲市の知井宮にある高野山真言宗のお寺である。このお寺は、智伊神社<sup>〔1〕</sup>の神宮寺として、

古くから信仰を集めてきたが、享祿元年（一五二八）、本堂を焼失した結果、それ以前の歴史についてはつまびらかではない。多聞院の中興開山は、永祿六年（一五六三）とさ

れる。その後、寛文年間（一六六一〜一六七三）に再び焼失し、貞享元年（一六八四）に本堂が再建されている。現在の本堂は、宝暦二年（一七五二）に建立されたものである。その後、享保九年（一七二四）、智伊神社移転のため、神宮寺から多聞院へと寺名が改められた<sup>〔2〕</sup>。

多聞院の御経蔵には、江戸時代の板本、写本を中心に、

五百点ほどの古文獻が伝えられている<sup>〔3〕</sup>。今般、駿馬大学御住職の御厚情により、ご所蔵の文献を対象に、角筆文献の発掘調査をさせていただいた。その結果、十二点の角筆文献を発見することが出来た。

本稿では、今般発見した角筆文献をもとに、考察したことのいくつかを述べてみたい。

## 一、多聞院藏角筆文献の書誌的事項

今回、多聞院から発見された角筆文献の書誌的事項を示すと次のようになる。

（1） 佛説阿弥陀經 一帖

江戸時代板 折り本 墨書書き入れなし

縦26・8×横8・4

一九九七年八月四日発見 角筆による節博士あり

(刊記) 龍谷山藏板

応命 藏板

応命 慶証寺釈玄智謹校

(2) 新版改正 論語 道春点 一冊

江戸時代板 袋綴装 墨書白書書き入れあり

縦25・6×19・3

一九九七年八月四日発見 角筆による節博士あり

(表紙見返し・墨書) 雲陽神門郡大塚村

高德寺什物

閑居智確法印求之

寛政四子歳門真高野登山之砌

(卷末・墨書) 高野山御移

(3) 秘藏宝鑰纂解 六冊

江戸時代元禄三年(一六九〇)板 袋綴装 墨書朱

書書き入れあり 縦27・5×横18・0

一九九七年八月四日発見

(表紙・墨書) 共六

(刊記) 元禄三龍飛庚午応鐘流金

書肆 村上勘兵衛

前川茂右衛門

同姓権兵衛

(4) 菩提心論 一冊

江戸時代板 粘葉装 墨書朱書書き入れあり

縦25・4×横16・2

一九九七年八月四日発見

(表紙・墨書) 応春

(卷末・墨書) 延享二乙丑初冬調月於神宮寺構之

釈師如実印

(後表紙・墨書) 東根院 応春

(5) 声字実相義口筆 三冊

江戸時代板 袋綴装 朱書書き入れあり

縦27・8×横19・1

一九九七年八月四日発見

(表紙・墨書) 共参

(識語) 元禄七龍集甲戌二月佛涅槃日

華雉書林 井上忠兵衛識

(6) 五教章 上中下 三冊

江戸時代慶安四年(一六五一)板 袋綴装 墨書書

き入れあり 縦26・5×横18・3

(表紙・墨書) 共参

(刊記) 慶安四<sup>辛卯</sup>稔十一月吉日

二条通玉屋町村上平樂寺

(7) 唐詩選 三冊

江戸時代弘化二年(一八四五)板 袋綴装 墨書書

き入れあり 縦22・0×横15・8

朱印「松林寺書籍印」あり 一九九九年四月二十九

日発見

(表紙・墨書) 共三

(表紙見返) 弘化二乙巳改刻 南郭先生考訂

正本 李于鱗唐詩選

紀府 書肆 高市氏梓行

(8) 四声記 一冊

明治写 袋綴装 墨書書き入れなし

縦22・4×横16・0

一九九九年四月二十九日発見

(9) 般若心経疏顕正記 全 一冊

江戸時代初期板 袋綴装 朱書書き入れあり

縦26・8×横18・1

二〇〇〇年八月一日発見

(10) 中院流事 同印信口決 同相伝 同口伝 永遍記

同口伝 行遍記 瑜祇切文 一冊

江戸時代享保六年(一七二一)板 袋綴装 朱書書

き入れあり 縦23・4×横16・6

二〇〇〇年八月一日発見

(巻頭・墨書) 快勢 真龍円而 快

中院流事 宥快御口成雄記之

(識語) 以忍真御本書写畢

弘和二年壬戌卯月廿一日

応永十歳月日佛子龍算

寛永八季辛未三月十三日 寂誘

寛永十七年八月二日 佛子良政

享保六年辛丑五月廿九日 寛運

(11) 略述法相義 一冊

江戸時代板 袋綴装 墨書朱書書き入れあり

縦27・8×横20・0

二〇〇〇年八月一日発見

(跋文) 貞享三季丙寅孟秋

武陵沙門守拙書于洛陽之寓舎

(12) 秘藏宝鑰略解懸談 六冊

江戸時代元禄四年(一六九一)板 袋綴装 墨書朱

書書き入れあり 縦28・2×横19・6

二〇〇〇年八月一日発見

(表紙・墨書) 共六

(刊記) 元禄四龍集辛未仲秋穀旦

梓行書林

前川茂右衛門

村上勘兵衛

前川権兵衛

以上に示した文献が、今回の文献調査で見つかった角筆文献で、計十二点、冊数にして二十八冊になる。このうち、板本は十一點、残りの一点が写本である。板本は、刊記が存するものからすると、慶安四年（一六五二）（文献番号6）のものが最も古く、弘化二年（一八四五）（文献番号7）のものが最も新しい。他の板本も全て江戸時代に刷られたものと思われる。従って、角筆文献のうち板本は、江戸時代初期のものから後期に亘っているということになる。ただし、角筆が書き入れられた時期は、全てが明らかであるというわけではない。写本（文献番号8）は、明治時代に書かれたものと思われる。これには、注音符らしき線が漢字の左傍に角筆で書き込まれている。仮名や漢字は見られない。おそらくは、書写者が、特に大事な内容が書かれていると思われる部分に、角筆で線を付したものである。明治時代に、当地で角筆が使用されていたことを示すもの

として注目される。

さて、角筆文献の内容を漢籍か仏典かという視点で捉えると、十二点のうち十点が仏典で、二点が漢籍である。このうち、角筆の書き入れが比較的多いものは、『声字実相義口筆』（文献番号5）と『秘蔵宝鑰略解懸談』（文献番号12）で、いずれも仏典である。これらの文献には、本文の漢字の読みを角筆を使って示したものも見られるが、これはむしろ少なく、ほとんどが本文中の字句の意味や出典を示したものである。また、これらの文献には、朱書も書き入れられていて、角筆の書き入れは、朱書と同じ内容のものが多し。朱書と角筆との関係も考えてみなければならぬ点であろう。なお、朱書と角筆について、書き入れられた先後関係についてであるが、両者が交わっているところからすると、朱書が先で、角筆が後である。

十二点の角筆文献のうち、文献の由来を知る手がかりとなるような、人名や地名、年紀が墨書されているものは、『論語』（文献番号2）と『菩提心論』（文献番号4）である。『論語』からは、その文献が、「出雲、神門郡大塚村の高徳寺にあったこと」「寛政四年（一七九二）、智確法印が門真高野に赴いた折に、手に入れたものだということ」が分かる。このことから、多聞院所蔵の古文獻が様々なと

ころから集まってきたものであるといえよう。とはいっても、「神門郡大塚村」とあるように、多聞院から近い所のものであって、多聞院蔵書が出雲地方に古くから伝わってきた文物であることを否定するものではない。『菩提心論』の墨書からは、延享二年（一七四五）に、神宮寺（現在、多聞院）の如実なる人物のもとにあったことが分かる。これらの墨書からすると、二文獻についていえば、江戸時代中期あたりから、出雲の地に存した文獻であることが分かる。他の文獻に書き入れられた墨書を全て調査したところでも、多聞院所蔵の文獻の多くが、江戸時代中期から後期、さらに今日に至るまで、代々の御住職によって徐々に集められてきたものであることが分かってきた。<sup>(5)</sup>ただ、残念なことには、角筆がいつ、だれによって書き入れられたものなのかという点については、必ずしも明らかではない。朱書も書き入れられている『声字実相義口筆』や『秘藏宝鑰略解懸談』からすると、その朱書の書き入れは字体から見て、江戸時代後期に書き入れられたものと思われることから、朱書より後に書き入れられた角筆は、恐らくは、江戸時代後期か、明治初期のものではなからうかと推定している。少なくとも、角筆が書き入れられたのは、文獻が多聞院に収められた後のことであろう。なお、『四声記』（文獻番号

8）の角筆（写本）も、明治時代に多聞院で書き入れられたものと思われる。

## 二 各角筆文獻の概要

今回見つかった十二点の角筆文獻につき、角筆の書き入れの状態を文獻ごとに示すと次のようになる。

### 1 佛説阿弥陀經

角筆によって節博士が数個所示されている。「多羅」の「多」の左下（十三丁裏3行目）、「語及」の「語」「及」それぞれの右下（十三丁裏4行目）などに認められる。

### 2 論語

角筆の書き入れは、少ない。判読し得たのは、「読」（ヨム）の読みとして、右傍に「ヨ」を付した一個所のみである。（五丁表8行目）

### 3 秘藏宝鑰纂解

角筆の書き入れは、一個所のみかと思われる。「云」の右傍に「フ」とある。恐らくは、「イフ」という読みを示したものかと思われる。

### 4 菩提心論

角筆の書き入れは、漢字の読みを示したものである。

「鋭」に「セイ」とある。傍の部分による百姓読みかと思われる。その他の書き入れについては、古辞書にも掲載されている読みを付したものであった。

## 5 声字実相義口筆

角筆の書き入れが、比較的多く認められる。本文の漢字の読みや、字句の意味、用語の出典などが角筆で書き入れられている。詳しいことについては後述する。

## 6 五教章

判読することができた角筆の書き入れは、「緩」の読みを示した「クハン」(下巻 二〇丁裏4行目)、「不相捨離」を「相ヒ捨離セズ」とサ変動詞として読むことを示した「セ」(下巻 三三丁裏4行目)の二箇所のみである。「緩」の音は「クワン」であるが、ここでは江戸時代の仮名遣いを反映して「クハン」と表記している。

## 7 唐詩選

多くは上欄外の空白部分に角筆によって片仮名が書き入れられている。ただし、それらが、本文のどの字句に對しての注なのかということについては未詳である。対応箇所が分かるところで、音韻史上、問題の存する例としては、「能ク」に對して、角筆で「ヨク」と「ヨラク」とが付されていることである。「ヨラク」は「ヨク」の

長音化したものではないかと思われる。

## 8 四声記

角筆による、注音符あり。角筆による仮名や漢字は認められない。

## 9 般若心經顯正記

角筆によって漢字の読みを示したものとや字句を訂正したものがあわせて十数カ所存する。漢字の読みについては、いずれも古辞書に掲載されているものである。本文の字句が角筆によって訂正されたものとしては、「四」を「五」にあらためたものの、「不惻」の「惻」を「測」にあらためたもの、あわせて二例が認められる。「四」を「五」にあらためた箇所には、墨書によっても「五」が書き入れられている。

## 10 中院流事 同印信口決 同相伝 同口伝 永遍記 同

口伝 衍遍記 瑜祇切文

角筆の書き入れで、認められたのは、一個所だけである。「葉」(五十一丁裏2行目)に對して、その訓である「ハ」が書き入れられている。

## 11 略述法相義

角筆の書き入れは少なく、凹みが薄く細いために判読

し得ないところもある。辛うじて一個所、「キ」(巻上三十四丁表3行目)という仮名が読めるが、何を示したものなのかはよく分からない。

## 12 秘蔵宝鑰略解懸談

角筆の書き入れが、比較的多く認められる。本文の漢字の読みや、字句の意味、字句の出典などが角筆で書き入れられている。詳しいことについては後述する。

### 三 『声字実相義口筆』『秘蔵宝鑰略解懸談』における角筆の書き入れ

ここでは、先に掲げた十二点の角筆文献のうち、比較的角筆の書き入れの多い、『声字実相義口筆』(文献番号5)、『秘蔵宝鑰略解懸談』(文献番号12)をとりあげ、角筆の書き入れから知られるところを述べる。この二文献はいずれも仏典で、角筆により、字句の注が多く書き入れられているという点で、共通するところがある。以下、漢字の読みを示した角筆と、字句の意味や出典を示した角筆とに分けて述べていくこととする。

(1) 漢字の読みを示した角筆の書き入れから  
漢字の音や訓を示した角筆で、口頭語的な要素が認めら

れるものを、項目毎に掲げる。

○開合が異なるもの(合音を開音にしたもの)

・大<sup>ハウ</sup>・鵬<sup>ハウ</sup> (ハウ) (秘蔵宝鑰略解懸談 第三冊 巻中一)

16丁表6行目

「鵬」の音は、本来「ホウ」である。ここでは、「ハウ」となっているから、合音であるところを開音にしていることになる。なお、「鵬」の右傍に書き入れられた墨書でも、角筆と同じく「ハウ」になっている。」

・俸<sup>ハウ</sup>・祿 (ハウ) (秘蔵宝鑰略解懸談 第三冊 巻中一 40)

丁表5行目

「俸」の音は、本来「ホウ」である。ここでは、「ハウ」となっているから、合音であるところを開音にしていることになる。」

○長音の短呼

・梟 (フクロ) (秘蔵宝鑰略解懸談 第三冊 巻中一 16)

丁表6行目

「梟」は本来、「フクロウ」の読みが正しいが、ここでは「フクロ」となっている。四拍目が長音化し、それを短呼したものと思われる。ただし、「フクロ」という語

は、他の文献でも既に認められるから、この地域の口頭語の特徴を示す現象であるとは言い難い」

以上、角筆で漢字の読みを記したもので、音韻的事象と関わると思われる例を述べてきた。結果としては、全体的に、辞書などに掲載されているものと合致するものが多いようである。開合に関わる事象では、二例が全て合音を開音にしたものであり、安藝地方や周防地方で見つかった角筆文献で開音を合音にした例が多数存する状況とは異なる<sup>(6)</sup>。

このことは、出雲地方が開音をむしろ保っていたことを示すのではなからうか。四つ仮名の混乱、拗音の直音表記など、他地方から見つかった角筆文献に比較的多く認められる音韻事象もみられない<sup>(7)</sup>。長音の短呼と思われる一例にしても、「フクロウ」を「フクロ」にしたような、古文獻に既に認められるような例で、長音の短呼が出雲地方で盛んに行われていたことを示すものではない<sup>(8)</sup>。全体的に用例数が少ないので、現段階で確定することはできないが、安藝地方や周防地方の角筆文献とは異なった傾向を示しているようである。

(2) 字句の意味や出典、字句の訂正を示した角筆の書き

入れから

『声字実相義口筆』と『秘蔵宝鑰略解懸談』には、角筆で字句の意味や出典、訂正を施した例がかなりの数認められる。ここでは、意味を施したもの、出典を示したものの、字句の訂正を示したものの三つに分けて、記していくこととする。以下の用例で、鍵括弧に入れて示した仮名が、角筆による書き入れである。

「声字実相義口筆」

① 字句の意味を施したものの

・ 第三ノ料全<sup>アタル(実書)</sup> 闕<sup>クレ</sup>之(「モントウ」)(巻一 8丁表8行目)

解説

第三の左傍に「モントウ」とあり。これは、声字実相義が、第一叙意、第二釈名体義 第三問答によつて構成されているところからくる注である。声字実相義の他の注釈書にも、「第三ノ問答」といった表現が見られる。

○第三、問答決疑<sup>ハ</sup>。亦義ノ中ニ自<sup>ラ</sup>顕<sup>ル</sup>カ故ニ別<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>釈<sup>セ</sup>歟。

(声字実相義開秘鈔<sup>(9)</sup> 巻上 2上7行目)

○第三ノ大科問答<sup>トハ</sup>御釈無<sup>レ</sup>之(声字実相義鈔<sup>(10)</sup> 3下15行目)



○第三ノ問答御釈無<sup>レ</sup>之（声字実相義鈔 3下15行目）

○又闕<sup>ルハ</sup>第三ノ科<sup>ヲ</sup>一釈名体義ノ下ノ問答<sup>ニ</sup>。其ノ義<sup>ニ</sup>尽<sup>カ</sup>故<sup>ニ</sup>別ノ不<sup>ニ</sup>牒<sup>積カ</sup>。〔声字実相義紀要 6上5行目〕

・自位（各也）（卷一 11丁表11行目）

解説

仏教語大辞典によれば、「自位」とは、「自己の個性、特殊性ということ。すべての事象は、それぞれがみな特殊な個性をもっていて、互いにそのすがたを異にしていること」とあり、各々の特殊性という意味であるから、「各也」と注していると思われる。

・斫樹（ヲ）抄<sup>略</sup>朱<sup>書</sup>シ（リンラク）（卷二 6丁表3行目）

解説

ここでいう抄とは輪略抄のことであることが、『声字実相義口筆』の本文より分かる。

○與<sup>ニ</sup>輪略抄<sup>ニ</sup>異<sup>ナリ</sup>也。積<sup>ニ</sup>第一ノ体声<sup>ヲ</sup>云。如<sup>ク</sup>三人斫<sup>ル</sup>樹<sup>ヲ</sup>指<sup>サシテ</sup>說<sup>ス</sup>其ノ人<sup>ヲ</sup>。即<sup>チ</sup>令<sup>ニ</sup>二体声<sup>ヲ</sup>云云。抄ハ所斫<sup>ル</sup>樹<sup>ヲ</sup>為<sup>レ</sup>体<sup>ト</sup>。（声字実相義口筆 17頁下6行目）

・佛<sup>陀</sup>所<sup>覺</sup>（朱<sup>書</sup>）〔所覺〕（卷二 7丁表1行目）

解説

声字実相義口筆に、「佛陀」を「覺者」とすることと関連するか。

○如<sup>シ</sup>下說<sup>テ</sup>一佛陀<sup>ヲ</sup>一名<sup>ヲ</sup>為<sup>ルカ</sup>中覺者<sup>ト</sup>上。〔声字実相義口筆 18頁下1行目〕

・双<sup>持</sup>（業ニツアリ）（卷二 10丁表4行目）

解説

声字実相義口筆に「持業」に「二」あると説く。「業ニツアリ」とは、これと関連するか。

○持業<sup>ニ</sup>有<sup>レ</sup>二。一ニハ体能<sup>ヲ</sup>持<sup>ス</sup>用<sup>ヲ</sup>。是<sup>レ</sup>ハ一体<sup>ニ</sup>持<sup>ス</sup>二用<sup>ヲ</sup>。二ニハ雙<sup>ヘテ</sup>持<sup>ス</sup>二兩業<sup>ヲ</sup>。是<sup>ハ</sup>一体<sup>ニ</sup>持<sup>ス</sup>二兩用<sup>ヲ</sup>。（声字実相義口筆 20頁下8行目）

・俱<sup>一</sup>不<sup>一</sup>用<sup>一</sup> 非<sup>ニ</sup>右傍白書不相応行左傍白書（「非ニ」「不相応行」）（卷二 12丁表9行目）

解説

仏教語大辞典によれば、「非ニ」とは、「有為と無為とのどちらでもないもの」という説明があり、「不相応行法」とは、「心法でも色法でもない有為法のこと」という説明がある。「俱不用」とは、「共に用いない」という意であるから、角筆の注との関連が認められる。

・名色支<sup>心白書</sup>（「心」）（卷二 13丁裏12行目）

解説

声字実相義口筆には、「名色支」に対して、「心法」とある。

○如<sup>ハ</sup>レ言<sup>フ</sup>二名色支<sup>ト</sup>。心法<sup>ニ</sup>（声字実相義口筆 23頁上7行目）

・等正覺ノ真言ノ言名成<sup>立</sup>ノ相ハ<sup>能正引証白書</sup>（「正引」（卷二 16丁表5行目）

解説

「正引」とは、「從正引証」のことであろう。声字

実相義鈔のなかに、「等正覚」の説明として、「引証肝要ナリ」とある。角筆の注は、これと関係するか。

○等正覚真言

等文

此ノ中ニ今ノ引証肝要ナリ。(声字実相義鈔 卷上 15上13行目)

・又於諸ノ色ノ聚ノ中ニ有リ二十四種ノ事

仮色計ノモノニモ十四種有リ(白書)

〔カシキノモノニモ〕

(卷四 23丁表7行目)

解説

声字実相義開秘鈔には、「律儀不律儀ハ皆是レ仮

ト有ナリト」とあるように、諸色には、仮実がある

ことを説いている。角筆の「カシキ」とは、白書の

「仮色」のことであろう。角筆の「カシキ」は、こ

のような色の仮実の説明と関連していよう。

○故ニ百法論ノ疏ニ云、瑜伽ニハ但説テ法処ノ色ノ中ノ威徳定ノ色

ハ是レ実物ノ有ナリ。律儀不律儀ハ皆是レ仮ト有ナリト。亦不レ可ラレ

説ク下此ノ定境ノ色ノ中ニ通スレハ中於仮ニ上。有ル義第五ハ亦

通スニ仮有ニ。故ニ知ヌ。定果ニ有リレ仮有リレ実。後ノ義ヲ為レ

善ハ順スルカニ理教ニ故ニ文。(声字実相義開秘鈔 卷上 15

上7行目)

・遍計

金白書

(念) (卷四 23丁裏7行目)

解説

仏教語大辞典によれば、「遍計」とは、「はからい。

主観的に構想すること。」という説明がある。角筆の

「念」という注は、前述のような「遍計」の意味を示すものであろう。

・列布

万タラ(白書)

〔万タラ〕 (卷五 9丁表6行目)

解説

声字実相義口筆には、「布列」と「曼陀羅」とを関

連させる記事がある。

○以下ハ示スニ諸尊布列ノ相ヲ一也。於テ有リレ二。初ニハ示スニ三重

曼荼羅布列ノ相ヲ一(声字実相義口筆 80頁下16行目)

②字句の出典を施したもの

・譬ヘハ

楞伽經(朱書)

如シ下刀自ラ不レ切ラレ刀ヲ(楞伽經) (第一冊

12丁表3行目)

解説

朱書・角筆に示す如く、『楞伽經』の本文に「刀自

不切刀」に関連する表現がみられる。

○如刀ニ自割一指亦不中自指上(入楞伽經) 卷第十 578頁下

21行目)

○如三刀不ニ自割ニ如三指不中自触上(大乘入楞伽經) 卷第七

634頁中12行目)

・次ノ前ノ因陀羅宗等引ニ証ニ前四丁目(白書) (四丁マヘ) (第一

冊 21丁表3行目)

解説

白書・角筆に示す如く、当該文献の「四丁前」に

関連する表現がみられる。

○如因陀羅宗ト者喩ヲ挙クル也（卷二 十七丁表12行目）

・譬如シ下有ヲレト為メニ利宝ヲ一処レテ傷ワ為ナス蛇毒ノ想イヲ。

（疏第一）（第五冊 4丁表9行目）

解説

角筆に示す如く、「疏第二」（大毘盧遮那成仏経疏 卷第二）<sup>16</sup>に關連する表現がみられる。

○譬如有人、暗中為利宝所作、謂為蛇毒。以作毒想故其心執着。（大毘盧遮那成仏経疏 卷第一 590頁上16行目）

③字句の訂正を施したもの

・詔<sup>上</sup> 九<sup>上</sup>成スレハ（「詔」（卷二 4丁裏7行目）

解説

本文の「詔」を、角筆で「詔」に訂正する。

・具<sup>上</sup>定<sup>上</sup>（定を朱書にて訂正）（「足」（卷五 2丁表8行目）

解説

本文の「定」を、角筆で「足」に訂正する。

・一切宝報<sup>上</sup>（宝を朱書にて訂正）（「実」（卷五 12丁裏3行目）

解説

本文の「宝」を、角筆で「実」に訂正する。

【秘藏宝鑰略解懸談】

①字句の意味を施したもの

・不<sup>レ</sup>知不<sup>レ</sup>知吾<sup>レ</sup>モ不<sup>レ</sup>知思<sup>ヒ</sup>思<sup>ヒ</sup>聖<sup>モ</sup>無<sup>シ</sup>心<sup>シルコト</sup>

（「化」「不知」の左傍、「自」「不知」の左傍、「人」「思」

の左傍）（第一冊 卷上一 2丁裏7行目）

・言<sup>ハ</sup>法<sup>ハ</sup>王（「尺迦」（第一冊 卷上一 3丁表2行目）

解説

仏教語大辞典によれば、「法王」とは「法門の王の意味で、仏のことをたたえていう名称」とある。

このように本文の「法王」と角筆の「釈迦」とは關連していよう。

・受<sup>一</sup>用<sup>一</sup>身<sup>ヲ</sup>（身<sup>ノ</sup>の左肩に朱書による商点の双点あり）（「他」（第六冊 卷

下三之二 19丁裏5行目）

解説

仏教語大辞典によれば、「受用身」とは、「さとの結果、法を享受し、また他の人々をして享受せしめる者の意」とあり、「他の人々」という意味で、角

筆の「他」が書き入れられているのであろう。

②字句の出典を施したもの

・顔氏家訓<sup>上</sup>朱書ニ云世一人ノ読ム<sup>上</sup>書ヲ者ノ但ク能ク言ヘルモノ<sup>上</sup>之ヲ

不<sup>レ</sup>能<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>（「上」（第三冊 卷中上 33丁裏2行

目）

・顔氏家訓ニ曰忠孝無<sup>シ</sup>レ聞<sup>エルコト</sup>（「上」（第三冊 卷中上

36丁裏5行目）

解説

角筆「顔氏家訓 上」に本文と同じような表現がある。

○世人読<sup>レ</sup>書、但能<sup>レ</sup>言<sup>レ</sup>之、不能<sup>レ</sup>行<sup>レ</sup>之、忠孝無<sup>レ</sup>聞、仁義不<sup>レ</sup>

足、加以斷二条訴、不<sub>三</sub>必得<sub>二</sub>其理<sub>一</sub>、宰<sub>二</sub>千戶<sub>一</sub>。不<sub>三</sub>必理<sub>二</sub>其民<sub>一</sub>。(顏氏家訓<sup>17</sup>上)

・輔行<sub>二</sub>之一<sub>一</sub>(朱書) 曰寺<sub>ト</sub>者西方<sub>ニ</sub>ハ云僧<sub>一</sub>伽藍<sub>ト</sub>「一之一」(第三冊 卷中上 37丁裏5行目)

【解説】 角筆「輔行 一之一」(止観輔行伝弘決)に本文と同じような表現がある。

○泉色如玉因以名焉。寺者。西方云僧伽藍此云衆園亦通名精舍。(止観輔行伝弘決<sup>18</sup>) 卷第一之一 142頁下1行目)

・嵇康<sub>カ</sub>養生論<sub>ニ</sub>文五十三<sub>一</sub>(朱書) 曰或<sub>レ</sub>益<sub>レ</sub>之<sub>ヲ</sub>以<sub>シ</sub>畎<sub>一</sub>澮<sub>一</sub>而泄<sub>ラ</sub>ス<sub>ニ</sub>之<sub>ヲ</sub>以<sub>ス</sub>ニ尾<sub>一</sub>闕<sub>一</sub>「(文五十三)」(第三冊 卷中上 39丁裏2行目)

【解説】 角筆「文五十三」(文選卷第五十三)に本文と同じような表現がある。

○或益<sub>レ</sub>之以<sub>二</sub>畎澮<sub>一</sub>、而泄<sub>レ</sub>之以<sub>二</sub>尾闕<sub>一</sub>、欲<sub>三</sub>坐望<sub>二</sub>顯報<sub>一</sub>者。(文選<sup>19</sup> 21頁)

・論語<sub>ニ</sub>泰伯篇<sub>一</sub> 曰舜<sub>ニ</sub>有<sub>テ</sub>二臣五人<sub>一</sub>而天下治<sub>マル</sub> (泰伯篇) (第三冊 卷中上 39丁裏7行目)

【解説】 角筆「泰伯篇」(論語 泰伯篇)に本文と同じような表現がある。

○舜有<sub>二</sub>臣五人<sub>一</sub>、而天下治。(論語<sup>20</sup> 泰伯 188頁1行目)

・論語<sub>ニ</sub>先進篇<sub>一</sub> 曰夫<sub>一</sub>子唱<sub>一</sub>然<sub>ト</sub>シテ歎<sub>ス</sub>「(先進篇)」(第三冊

卷中下 40丁表4行目)

【解説】 角筆「先進」(論語 先進篇)に本文と同じような表現がある。

○夫子喟然嘆曰、吾與<sub>レ</sub>点也。(論語<sup>21</sup> 先進 250頁5行目)

・智論<sub>ニ</sub>曰五十八<sub>一</sub>(朱書) 佛告<sub>テ</sub>帝釈<sub>ニ</sub>言<sub>ハク</sub>汝<sub>チ</sub>受<sub>ニ</sub>持<sub>一</sub>スベシ是<sub>レ</sub>般若波羅蜜<sub>ヲ</sub>「(五十八)」(第三冊 卷中下 46丁裏3行目)

【解説】 角筆「五十八」(大智度論 卷五十八)に本文と同じような表現がある。

○爾時可<sub>二</sub>諸天讚<sub>一</sub>告<sub>レ</sub>詔言。汝受<sub>ニ</sub>持<sub>一</sub>是般若波羅蜜<sub>一</sub>。(大智度論<sup>22</sup> 卷五十八 469頁上段23行目)

・起信<sub>ノ</sub>疏<sub>ニ</sub>云積<sub>テ</sub>功<sub>ヲ</sub>所<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>故<sub>一</sub>云<sub>二</sub>功德<sub>一</sub>「(上)」(第三冊 卷中下 47丁表5行目)

【解説】 角筆「上」(起信論疏 卷五十八)に本文と同じような表現がある。

○無有<sub>二</sub>限量<sub>一</sub>。積功所得。以之故言無量功德。如是功德。(起信論疏<sup>23</sup> 卷五十八 204頁上18行目)

・易<sub>ノ</sub>繫辭<sub>ニ</sub>曰子<sub>ノ</sub>曰勞<sub>シテ</sub>而不<sub>レ</sub>伐<sub>一</sub>有<sub>テ</sub>功<sub>一</sub>而不<sub>レ</sub>德<sub>ト</sub>厚<sub>キコト</sub>之<sub>ニ</sub>至<sub>リ</sub>ナリ也。(上) (第三冊 卷中下 47丁表6行目)

【解説】 角筆「上」(繫辭伝 卷上)に本文と同じような表現がある。

○勞謙、君子有終。吉。子曰。勞而不伐。有功而不德。厚之至也。〔繫辭傳 上〕<sup>(24)</sup> 334頁

・釈論<sup>第二朱書</sup> 曰上味ノ妙ノ藥、當<sup>ナ</sup>二七勝<sup>シテ左勝</sup> 由テ二所ノ對、疾障ニ出現能化ノ教法ハ定テ由テ二所ノ治ノ機根ニ發一起ス<sup>上</sup> (第一) (第四冊 卷中下 13丁裏3行目)

解説 角筆「第二」(釈摩訶衍論)に本文と同じような表現がある。

○此義云何。為欲顯示上味妙藥。當由所對疾障出現。能化教法。定由所治機根發起。(釈摩訶衍論 第一)<sup>(25)</sup> 597頁中4行目

・戒序<sup>ニ三廢耶(朱書)</sup> 曰一千二百ノ草ノ藥七十二種ノ金丹ハ悲<sup>テ</sup>身ノ病ヲ而作<sup>レ</sup>リ方<sup>ラ</sup>一十二部ノ妙ノ法八萬四千ノ經ノ教ハ哀<sup>シテ</sup>ニ心ノ疾ヲ而垂<sup>ル</sup>レ訓ヲ (三廢耶) (第四冊 卷中下 14丁表6行目)

解説 角筆「三廢耶」序(三昧耶戒序)に本文と同じような表現がある。

○若夫一千二百草藥。七十二種金丹。悲身病而作方。一十二部妙法。八萬四千經教。哀心疾而垂訓。(三昧耶戒序)<sup>(26)</sup> 4頁下23行目

・涅槃經<sup>ニ聖行品(朱書)</sup> 曰是ノ時ニ菩<sup>サ</sup>薩即至<sup>リ</sup>ニ僧坊ニ若見ニ如來及<sup>ニ</sup>佛ノ弟子ノ威儀具足諸根寂靜其ノ心柔和清淨寂滅

一即至<sup>ニ</sup>其ノ所<sup>ニ</sup> (聖行品) (第四冊 卷中下 18丁表2行目)

解説 角筆「聖行品」(大般涅槃經)に本文と同じような表現がある。

○此時菩薩即至僧坊。若見如來及佛弟子。威儀具足諸根寂靜。其心柔和清淨寂滅。即至其所。(大般涅槃經)<sup>(27)</sup> 卷第十一 聖行品 673頁下13行目

・疏<sup>第二朱書</sup> 云最<sup>ニ</sup>初<sup>ニ</sup>解<sup>ニ</sup>了<sup>スル</sup>唯<sup>ニ</sup>湫<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>我<sup>ヲ</sup>即名<sup>ニ</sup>出<sup>ニ</sup>世<sup>ニ</sup>間<sup>ニ</sup>必<sup>ニ</sup>ト<sup>一</sup>也 (末) (第四冊 卷中下 26丁表7行目)

解説 角筆「末」(大日經疏)の第二卷の後半部に本文と同じような表現がある。角筆が、どの本によって書き入れられたかということについては定かではないが、恐らくは、当該個所が第二卷末にあったため、角筆では「末」と書かれたのであろう。

○最初解了唯湫無我時。即名出世間心生也(大日經疏卷第二)<sup>(28)</sup> 601頁上1行目

・法華<sup>ニ七常不輕品(朱書)</sup> 云為<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>求<sup>ニ</sup>声<sup>ノ</sup>聞<sup>ヲ</sup>者ノ上說<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>應<sup>ニ</sup>四<sup>ニ</sup>諦<sup>ノ</sup>法<sup>ヲ</sup>一度<sup>シ</sup>ニ生老病死ヲ究<sup>ニ</sup>ニ<sup>ニ</sup>竟<sup>ニ</sup>セ<sup>ニ</sup>涅槃<sup>ヲ</sup> (七常不輕品) (第四冊 卷中下 42丁表6行目)

解説 角筆「七常不輕品」(妙法蓮華經卷第六)に本文と同じような表現がある。ただし、「卷六」であるべ

きところを、「七」（巻七）となつてゐるのは、不審。

○為求声聞者。説応四諦法。度生老病死究竟涅槃。（妙法蓮華經卷第<sup>29</sup>）

常不輟品 50頁4行目

・法華<sup>二</sup>第三<sup>一</sup>墨書 云譬<sup>ハ</sup>如<sup>シ</sup>下五百由旬<sup>ノ</sup>險難惡道<sup>ノ</sup>曠<sup>カニ</sup>絶

テ無<sup>キ</sup>人怖<sup>レ</sup>畏<sup>ノ</sup>之處<sup>ニ</sup>若<sup>シ</sup>有<sup>テ</sup>多<sup>ク</sup>衆<sup>ヲ</sup>欲<sup>ト</sup>過<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>道<sup>ヲ</sup>至<sup>シ</sup>

ント珍<sup>シ</sup>宝<sup>ヲ</sup>處<sup>ニ</sup>有<sup>リ</sup>ニ<sup>リ</sup>導<sup>ス</sup>師<sup>一</sup>（「化城喻品」）（第四冊

卷中下 44丁表6行目）

解説

角筆「化城喻品」（妙法蓮華經卷第七）に本文と同じような表現がある。

○譬如五百由旬險難惡道曠絶無人怖畏之處。若有多衆。欲過此道至珍宝處。（妙法蓮華經<sup>30</sup>）

化城喻品第七 25頁下

26行目

・釈論<sup>第一</sup>（朱書）云真如法界ノ之宮ノ殿也。（「第一」（第五冊

卷下之一 6丁裏5行目）

解説

角筆「第二」（釈摩訶衍論）に本文と同じような表現がある。

○建立真如法界之宮殿。住正役二僧而不断絶故。（釈摩訶

衍論<sup>31</sup>） 596頁27行目

・疏<sup>二</sup>（朱書）云此ノ中ノ無<sup>レ</sup>為生<sup>ノ</sup>死ノ縁ノ因生ノ壞等ノ義ハ如<sup>シ</sup>勝

鬘宝ノ性佛ノ性ノ論等ノ中ニ広ク明<sup>ス</sup>カ（「末」（第五冊 卷

下之一 25丁表1行目）

解説

大日經疏に本文と同じような表現がある。これは、大正新修大藏經所収の大日經疏によれば、第二卷の後半部にあたる。角筆が、どの本によつて書き入れられたかということについては定かではないが、恐らくは、当該箇所が第二卷の末にあつたため、角筆

で「末」と書いたのであろう。

○此中無為生死縁因生壊等義。如勝鬘宝性佛性論中広明。

（大日經疏<sup>32</sup> 第二 603頁中8）

・勝鬘經云世尊有<sup>二</sup>有<sup>一</sup>為<sup>ニ</sup>分段<sup>一</sup>朱書 生<sup>一</sup>死<sup>ト</sup>無<sup>レ</sup>為<sup>ニ</sup>變易<sup>一</sup>朱書 生<sup>一</sup>死

ト（「分段」「變易」（第五冊 卷下之一 25丁表3行目）

解説

本文と同じような表現は、勝鬘經にみとめられる。角筆の書き入れである、「分段」「變易」という語も、その文脈中で使われている。

○世尊有有為生死無為生死。受三界分段生死竟。更當為變

易生死所為故。還名分段生死作有為生死。受變易生死更

不為生死所為。是故即名變易作無為生死也。（勝鬘經<sup>33</sup>）

267頁上10行目

・疏<sup>二</sup>（朱書）云覺<sup>ル</sup>ハ此ノ心ノ本ノ不<sup>レ</sup>生<sup>ヲ</sup>即是<sup>レ</sup>漸ク入<sup>ル</sup>阿<sup>ニ</sup>

字ノ門<sup>ニ</sup>（「二之末」（第五冊 卷下之一 28丁表4行

目）

解説

大日經疏に本文と同じような表現がある。大正新

修大藏經所収の大日經疏によれば、この用例は、第

二巻の後半部にある。角筆が、どの本によつて書き

入れられたかということについては定かではないが、

恐らくは、当該個所が第二巻の末にあつたため、角

筆で「二之末」と書いたのであろう。

○覺此心本不生。即是漸入阿字門。(大日經疏<sup>(34)</sup> 第二巻

603頁中5行目)

・後漢郊祀志<sup>(二)</sup> 廣弘明集第一(朱書) 曰覺行円満窮<sup>メ</sup>原<sup>ヲ</sup>極<sup>ム</sup>底<sup>ニ</sup>

ヲ (廣弘第一) (第五冊 卷下之一 29丁表6行目)

解説 廣弘明集の巻第一(廣弘明集 第一 98頁中2行

目)に「後漢書郊祀志」とある。

・疏<sup>(二)</sup> 之末朱書 云如<sup>(三)</sup> 釈論<sup>(三)</sup> 云<sup>(三)</sup> 佛ノ智ノ慧ノ清ノ淨ナルカ故ニ出<sup>(三)</sup> 二

諸ノ觀ノ上ニ不<sup>レ</sup>觀セ<sup>(三)</sup> 諸ノ法ノ常ノ相無<sup>(三)</sup> 常ノ相等ヲ<sup>(三)</sup> (一之

末) (第五冊 卷下之一 41丁裏3行目)

解説

大日經疏に本文と同じような表現がある。大正新

修大藏經所収の大日經疏によれば、この用例は、第

一卷の後半部にある。角筆が、どの本によつて書き

入れられたかということについては定かではないが、

恐らくは、当該個所が第一巻の末にあつたため、角

筆で「一之末」と書いたのであろう。

○如釈論云、佛智慧清淨故。出諸觀上。不觀諸法常相無常

相。(大日經疏 卷第一 587頁下13行目)

・疏<sup>(二)</sup> 之之册五前右朱書 云行<sup>(一)</sup> 者得<sup>(二)</sup> 如<sup>(三)</sup> ノレ是微細ノ慧ヲ一時觀スルニ

一一切染淨ノ起<sup>(三)</sup> レ心朱書 諸ノ法ヲ乃至少<sup>(三)</sup> 一分猶<sup>(三)</sup> シ如クモ隣虛

ノ無<sup>(三)</sup> 下不<sup>(三)</sup> 從<sup>(三)</sup> 緣生モ<sup>(三)</sup> 者(末) (第六冊 卷下之二 18

丁表1行目)

解説

大日經疏に本文と同じような表現がある。大正新

修大藏經所収の大日經疏によれば、この用例は、第

二巻の後半部にある。角筆が、どの本によつて書き

入れられたかということについては定かではないが、

恐らくは、当該個所が第二巻末にあつたため、角筆

では「末」と書かれたのであろう。なお、朱書では、

「二之卅五」の如く、丁数まで記されている。

○行者得如是微細慧時。觀一切染淨諸法。乃至少分猶如隣

虛。無不從緣生者。(大日經疏 卷第二 604頁上21行目)

・疏<sup>(二)</sup> 之之三四後ノ左傍朱書ニノ末左傍朱書 云第一三ノ重微細ノ百ノ六ノ

十ノ心ノ煩惱業ノ寿種ヲ除<sup>(三)</sup> テ復<sup>(三)</sup> 第九ノ証ノ理也墨書 有<sup>(三)</sup> 佛樹ノ牙生スル

コト (二ノ末) (第六冊 卷下之二 18丁裏4行目)

解説

大日經疏に本文と同じような表現がある。大正新

修大藏經所収の大日經疏によれば、この用例は、第

二巻の後半部にある。角筆が、どの本によつて書き

恐らくは、当該個所が第二巻末にあつたため、角筆では「二ノ末」と書かれたのであろう。なお、右傍朱書では、「二之三十四後ノ左」の如く、詳しく書かれている。左傍朱書は、「二ノ末」とあり、角筆の書き人れと同じである。

○第三重微細百六十心。煩惱業壽種除。復有佛樹牙生。

(大日経疏 第二巻 604頁上11行目)

・張ノ審使ヒセシトキ 二大ノ宛ノ国ニ得ノ其ノ種ヲ至ルニ中ノ国ニ張審後漢

除六十二具見タリ朱書 (六十一) (第六冊 卷下之二 19丁裏

2行目)

解説 漢書「六十一」は、「張審」について書かれた巻

である。朱書では、「後漢書」と書かれているが、これは「漢書」の誤りであろう。

○張審李広利伝第三十一 班固 漢書六十一(漢書<sup>35</sup>) 卷61

761頁)

③字句の訂正を施したもの

・貧食(貧を朱書にて訂正) 財等ト者釈名ニ四九右墨書 曰食ハ探也。

(「貧」を角筆にて囲む) (第四冊 卷中下 15丁表6行目)

解説 本文の「貧」を、角筆の線で囲み、朱書にて「食」

に訂正する。

・断シテ二本ノ来末(来を朱書にて訂正) 一切ノ最重ヲ(「末」) (第五冊 卷下之一 7丁表9行目)

解説 本文の「来」を、角筆で「末」に訂正する。

・諸子等ノ安隱(隱を朱書にて訂正) (穩) (第五冊 卷下之一 37丁表7行目)

解説 本文の「隱」を、角筆で「穩」に訂正する。

・彼ニ日間切(切を朱書にて訂正) 聞ク(窃) (第六冊 卷下之二 16丁裏6行目)

解説 本文の「切」を、角筆で「窃」に訂正する。

以上、『声字実相義口筆』と『秘藏宝鑰略解懸談』に書き入れられた角筆のうち、本文の注を記したものを分類し示した。角筆の書き入れの内容については、両文献ともに、字句の意味を施したもの、字句の出典を施したもの、字句の訂正を施したものが認められる。

本文の字句の意味を施したものと思われる角筆の内容を、仏教語大辞典で確認してみると、概ねその内容と一致する。このことから、角筆の書き入れの内容は、本文の字句の解釈に沿ったものであり、角筆の書き入れも、教義研究の跡をたどる一助となりうるものと考えられる。



字句の出典を施したもののについては、出典名のみが書き入れられたもの、巻数や丁数のみが書き入れられたもの、出典名と巻数が両方書き入れられたものなどがある。出典名は、略称を用いており、書名が不明のものもある。また、出典の中には、当該の角筆文献そのものの巻数や丁数を記したものもある。これら、出典については、大蔵経などを利用して、本文の字句が角筆の記述どおりに、出典とされる文献に存するかどうかということを確認していった。その結果、概ね、角筆の指摘する出典に、被注部分と同じ字句が存することが分かった。なかには、角筆によって示された巻数と、私が調べた本文の巻数とが合わないものもあるが、これは、角筆を書き入れた人物が所有していたテキストの本文の巻数の分け方に則っているために生じたことであろう。例えば、『秘蔵宝鑰略解懸談』では、角筆で「二ノ末」としたり、朱書で「第二」とあるところを角筆で「末」と補ったりしている。大蔵経の大日経疏によれば、第二を本末に分けてはいない。これなどは、角筆の加筆者の使用テキストが、第二を更に本と末に分けていたものであったためであろう。

角筆は概ね、朱筆のあとをなぞるように書かれていて、多くの場合、朱筆の内容を変えるものでない。このことか

ら、角筆が書き入れられた目的を考えると、加筆者は角筆を書き入れながら、先に書かれていた朱筆の内容をひとつひとつ確認していったものと想像される。先に挙げた、『秘蔵宝鑰略解懸談』のように、朱筆が「第二」とあって、角筆が「末」とあるように、朱筆と角筆が異なるようなところでは、朱筆の内容を出典にあたって確認し、角筆で朱筆を補ったものとみられる。

以上のように、『声字実相義口筆』と『秘蔵宝鑰略解懸談』には、朱筆や角筆によって、本文の字句の出典が示されている。その出典には、多くの仏典や漢籍が挙げられており、おそらくは、これらの出典は、加筆者ひとりが探り当てたものではなく、伝統的な教義研究の中で培われ、各寺院ごとに代々伝えられてきたのであろう。知識を後に伝えるという点では、板本、写本等に書き入れられた詳細な朱書や墨書は重要なものであり、そのテキストが後代に伝えられ、そのテキストの朱書や墨書が他のテキストに書き写されたり、テキストの本文（朱書や墨書も含めて）が写本として書き写されることにより、知識は後代へと蓄積されていったのであろう。このような知識の継承において、角筆が果たした役割もまた重要であつたろう。角筆は、墨書や朱書を書き入れるための下書きとして、あるいは今回

の角筆文献のように、既に書かれている朱書や墨書の確認として使用され、角筆を書き入れるという行為をとおして、代々伝えられていくべき朱書や墨書は、より洗練されたものとして後代に伝えられていくことができたのではなかったか。

## ま と め

一九九七年から二〇〇一年にかけて行った、島根県出雲市知井宮町の多聞院における角筆文献発掘調査で、十二点の角筆文献を発見した。このなかには、漢籍もあれば仏典も存し、角筆の書き入れも、本文の字句の読み方を記したものや、字句の意味を記したもの、出典を記したものなど、多様な内容の書き入れが認められた。今回は、角筆による書き入れの、近世の口頭語の資料としての重要性と、仏典の教義研究の歴史をさぐる資料としての重要性という、二方向から考察した。

前者の側面では、数は少ないものの、安藝地方で見つかった角筆文献とは異なる傾向が見出された。現在でも、安藝方言と出雲方言とでは、アクセントや音韻の面で異なりをみせる。語彙的にも、異なる点が多い。近世の角筆文献で、安藝地方のものと出雲地方のものとの間に、異なり

がより明らかになっていけば、現代方言に通じていく過程が分かってくるかもしれない。そのためにも、今後、出雲地方からより多くの角筆文献を発見し、角筆の読解も進めていきたいと考えている。

また、後者の側面、すなわち教義研究の跡をたどる資料としての側面では、今回、『声字実相義口筆』と『秘蔵宝鑰略解懸談』に書き入れられた角筆を、出来る限り読みとり、そこに書かれている内容を、他の資料で確認していく作業を行った。その結果、角筆の書き入れの信憑性を確認することができたと思う。したがって、朱書や墨書のみならず、角筆の書き入れも、教義研究の資料たり得ると考えられる。むしろ、角筆を加えて考えることによって、知識が後世に伝えられていく過程を、より深く知ることが出来るのではないかと考えている。

## (注)

- (1) 「風土記」には知乃社と、「延喜式」には智伊神社と、「雲陽誌」には智伊神社と記されている。(『日本地誌16 島根県・島根県中国四国地方総論』 青野寿郎・尾留川正平 編 株式会社二宮書店 一九七七年三月)
- (2) 養龍山多聞院御住職 駿馬大学氏および神門クラブのご指示による。

(3) 『島根県出雲市知井宮町養龍山多聞院藏書目録並びに角筆文獻目録』(柚木靖史編 私家版)を参照のこと。

(4) 角筆が先に書き入れられていて、その凹みの上から朱を入れると、凹んだ部分に墨の溜まりが出来たり、掠れが生じたりするが、このような現象は当該二文獻には見られない。また、『秘藏宝鑑略解懸談』(文獻番号12)には、朱書で「廿八六」とあり、それに続けて角筆で「丁」を付けている。このことは、朱書の不足部分を、角筆で後から補ったことを示している。

(5) 注3の文獻によれば、江戸時代に慈雲、厚道、圓示房、明治時代に快証、佐伯明道等の名が見られる。

(6) 安藝地方における開合の乱れの事象については、以下の論文を参照されたい。

小林芳規「広島県の角筆文獻」(『広島女子大國文』第7号 一九九〇年八月)

拙稿「広島市比治山町在 法正寺の角筆文獻について」

『広島女学院大学日本文学』第5号 一九九五年七月

拙稿「厳島神社の角筆文獻」(『広島女学院大学日本文学』

第8号 一九九八年七月)

拙稿「浄円寺(広島県佐伯郡大柿町大君)の角筆文獻」(『広島女学院大学論集』第50集 二〇〇〇年十二月)

拙稿「東広島市志和町 報専坊の角筆文獻——ニタイブの角筆文獻からの考察——」(『広島女学院大学国語国文学誌』第30号 二〇〇〇年十二月)

周防地方における開合の乱れの事象については、以下の論文を参照されたい。

小林芳規 柚木靖史 豊田尚子 岡野幸夫「山口地域の角筆文獻」(『内海文化研究紀要』第21号 一九九二年三月)

拙稿「光と影が織り成す文字の世界——山口県・広島県・岡山県の角筆文獻——」(『広島女学院大学公開講座論集』一九九五年五月)

拙稿「大島郡の角筆文獻——普門寺(大島郡橘町安下庄)における角筆文獻を中心として——」(『橘町郷土学会誌 ふるさと 22号』橘町郷土会編 平成10年 三月二十日)

拙稿「山口県文書館における角筆文獻調査」(『西日本各地を対象とする角筆文獻発掘調査研究と角筆文字解説用機器の開発研究』平成九年度～十一年度 科学研究費補助金基礎研究(B) 研究成果報告書 研究代表者 小林芳規)

(7) 四つ仮名の混乱の例についても、(6)の論文を参照のこと。

(8) 『日本国語大辞典』(小学館)には、次のように「ふくろ」という見出し語が掲載されている。

ふくろ(梟)「ふくろう」に同じ。

太平記 十三 北山殿謀救事「古き梢の梟(フクロ)の声」日本釈名 中「梟(フクロ)毛のふくるる鳥なる故也」

(下学 和玉 伊京 明応 饅頭 黒本)

(9) 『真言宗全書 十四集』(昭和五十二年八月三十一日発行 続真言宗全書刊行会 代表者 中川善教)による。

- (10) (9) に同じ。
- (11) (9) に同じ。
- (12) 『仏教語大辭典』(中村 元 著 東京書籍 平成三年九月七日第4刷)
- (13) (9) に同じ。
- (14) 「大正新修大藏經」による。
- (15) (14) に同じ。
- (16) (14) に同じ。
- (17) 「顏氏家訓 上」(中国古典新書 昭和五十七年十月三十日 明德出版社)
- (18) (14) に同じ。
- (19) 「文選」(全釈漢文大系32 文選 文章篇七 昭和六十一年九月三十日 小尾郊一 著 集英社)
- (20) 「論語」(新訳漢文大系1 著 吉田賢抗 明治書院 昭和四十一年四月一日 第10版)
- (21) (20) に同じ。
- (22) (14) に同じ。
- (23) (14) に同じ。
- (24) 「易経」(易経 下 全釈漢文大系10 集英社 昭和五十八年六月二十日第三刷 鈴木由次郎)
- (25) (14) に同じ。
- (26) (14) に同じ。
- (27) (14) に同じ。
- (28) (14) に同じ。

- (29) (14) に同じ。
- (30) (14) に同じ。
- (31) (14) に同じ。
- (32) (14) に同じ。
- (33) (14) に同じ。
- (34) (14) に同じ。
- (35) (百衲本二十四史 台湾商務印書館印行)